

沖縄クモ観察記

新 海 明（国立音大附属音楽高等学校）

1982年7月から1984年5月まで、合計7回ほど沖縄へ出かけた。この調査はオオジョロウグモ *Nephila maculata* の網構造を観察するのが主目的であったが、オオジョロウグモのほかにも色々なクモに出会った。ここでは、その際に得られた、クモの断片的な観察結果について報告する。

なお、1982年7月の第1回目の調査行に際しては、沖縄県教育センターの下謝名松栄氏に調査地を案内していただいた。ここに御礼申し上げる。

○キジロオヒキグモ *Arachnura logio* の餌捕獲行動

1983年5月14日、中城（ナカグスク）城跡において、キジロオヒキグモの♀成体を1頭発見した。網の中には卵のうを5個持っていた。

このクモのキレ網に、バッタを1匹与えてみた（図1）。餌の振動を感じたクモは、餌の方向



図1 餌を糸で包むキジロオヒキグモ

へ体軸を向けて2回ほど、タテ糸を前後にすばやくひくjerkingと呼ばれる行動をした。そして、ゆっくりと餌に近づきそばまで来ると向きを変えて、捕帶を用いて餌を包みはじめた(wrapping)。真白な糸で覆われた餌は2~3度噛みつかれた(biting)。この時に、白帯が全て濡れてしまうほど毒液が出されたのには驚いた。その後、餌のまわりの糸を切り(cut out)、こしきへ上顎で喰わえて運んでいった。こしきへ着くと、そこで再び捕帶を用いて餌を入念に包み直した(post-immobilization wrapping)。そして餌を食べはじめた。これら一連の捕獲行動は典型的な進歩型(advanced type)のものであった。

また、餌を食べている最中に、再びバッタを1匹網にかけてみたところ、餌の捕り方は前と全く

同様であったが、捕獲地点で wrapping した後は餌をそのまま、そこに放置してこしきへ戻り、すでに食べていた餌を再び食べ始めた。

我国では、キジロオヒキグモに出会うことは少なく、ましてその捕獲行動の報告などは皆無だと考え、ここに紹介して記録にとどめることにした。

○オオジョロウグモ *Nephila maculata* の餌捕獲行動（特に、bite & back-off behavior について）

1984年12月に放映された「わくわく動物ランド」で、オオジョロウグモの網に音叉をつけた時に、クモはこの音叉に対してどのように反応するかといった問題があった。おそらく多くの人が（クモの研究者でさえ）「音叉を糸で包む」と考えたと思う。

キジロオヒキグモの項でも少しふれたが、餌捕獲行動には「wrap 先行型」と「bite 先行型」がある。キジロオヒキグモの場合 wrap 先行だが、オオジョロウグモは bite 先行なのである。だから、オオジョロウグモの網に餌がかかった場合、このクモはいきなり噛みつきにかかるので、音叉を糸で包むことはない。ジョロウグモ *N. clavata* でも事情は同じである。では、オオジョロウグモとジョロウグモの餌捕獲行動は全く同じかというとそうではない。オオジョロウグモはジョロウグモと同じく餌に噛みつくのだが、こしきへその餌を持ち帰る際に、上顎で餌を噛みついだまた「後ずさり（back-off）」するのである。この行動をよく見ると、クモは第4脚を交互に動かしながら、ゆっくりとこしきまで後ずさりして戻る。ジョロウグモの場合は、上顎で餌を噛んだまま持ち帰るときと、糸疣から垂らした糸の先に餌をつけて持ち帰る時があるが、いずれにせよこしきの方向へ頭を向き直した後に戻っていく。

なぜ、このように同属近縁でありながら、餌運搬の方法が異なるのか不思議であるが、私は、オオジョロウグモとジョロウグモの体の大きさと、餌の大きさとの違いが運搬法の違いの原因の一つではないかと考えている。

○オオジョロウグモの産卵場所

1983年10月16日に名護城（ナングスク）でオオジョロウグモの産卵に出会った。ジョロウグモの場合には、産卵は樹皮や葉になされるのが普通だが、オオジョロウグモの場合はリター中に産卵する。これは、嶺井氏も見ておられるようだし（新海・高野、1984）、また F. & J. Murphy



図2 オオジョロウグモのリター中の産卵

及びW. Corley も観察している(Robinson, 1980)ことから、オオジョロウグモのリター中の産卵は、このクモにとっては普遍的な習性と考えられる。しかしながら、なにゆえ、リター中の多くの肉食性動物の棲む危険な場所にわざわざ産卵するのであろうか。図2に示すように、オオジョロウグモは一生懸命に産んだ卵のうをカムフラージュするのであるが……。

○イソウロウグモ *Argyrodes* の餌盗み行動

沖縄へ行って、クモに関する第一の印象はチブサトゲグモとマルゴミグモの個体数の多さと、大形の円網のどれにも必ず多数侵入しているアカイソウロウグモとシロカネイソウロウグモについてであろう。特に、オオジョロウグモの網の中には最低でも数頭、多いときには50頭ものイソウロウグモがみられた。

オオジョロウグモの♀成体は、リュウキュウコガネやリュウキュウアプラゼミといった大形の昆虫を捕える。餌が網にかかるまでは、網の中にバラバラにいて、ゆっくりと動いていたイソウロウグモたちは、餌が網にかかるやいなや一斉に行動を開始する。今までの緩慢な行動とはうって変わり、急に大胆かつ、早く動くようになり餌へ向かう。そして、餌にたどりつくとオオジョロウグモと一緒にになって食事にありつくのである。盗み寄生者(Kleptoparasite)であることは言葉の上、そして話では聞いてはいたが、まわりから寄ってたかって餌を食うありさまを見た時はやはり感動した。思わず数十枚も写真を撮ってしまった(図3)。

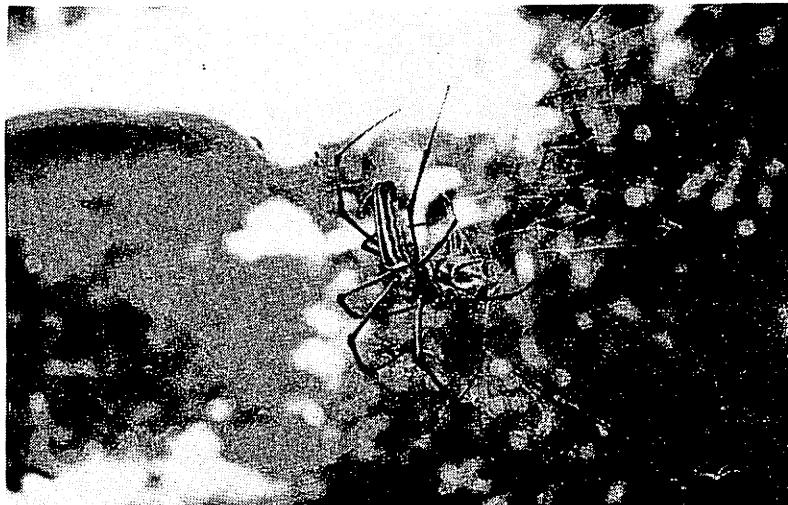


図3 リュウキュウコガネを食べるオオジョロウグモとアカイソウロウグモ

網の主人であるオオジョロウグモは時々気になるのか、脚で払ったり、餌を動かしてみたりするのだが、その途端にイソウロウグモたちは糸をひいたまま、すっと下へ降りてしまう。やがてオオジョロウグモが食べ始めると、糸を伝い、また元の餌の所まで上がってきて餌の盗み食いを始めるので、まるでイタチゴッコである。私自身は観察していないが、主の網にイソウロウグモが多くなりすぎると、主のクモは嫌や気(?)がさすのか、自分の網を放棄してしまい、新しい網を別の所で張り直すこともあるということである。

アカイソウロウグモやシロカネイソウロウグモのように典型的な Kleptoparasite(盜み寄生者)もいるが、イソウロウグモの中には host - killer(主を捕食するクモ)や、その中間的な習性を持つクモ、さらに網を張るものまでいるようなので、今後は色々な角度からの調査がのぞまれる。

○ハラビロスズミグモ *Cyrtophora unicolor* の網

沖縄でサラ網を見るのは稀れである。1982年12月に名護城に行ったところ、大きさ・形ともクスミサラグモにそっくりな網を見つけた。よく見るとクモの姿は見えず、網の中央に枯れ葉が一枚ひっかかっているのみであった。そこで、その枯葉を少しつついたところ、中からクモが飛び出してきた。一見するとキヌアミグモのような気がした。それならばということで、そのサラ網をよくよく見直したところ、やはり網はメッシュとなっていた。持ち帰って調べてみると、このクモはキヌアミグモではなく、ハラビロスズミグモの幼体であった。

これ以後、ハラビロスズミグモにはついにお目にかかれなかったが、幼体の網がサラ網になんと似ていることか。

翌年3月にも同所を訪れた。サクラは咲き終り、もう若葉を空高く伸ばしていた。初夏のような陽気の中で再び、ハラビロスズミグモを探したのだが、ついにみつけられなかつた。しかし、別の「サラ網」にたくさん出会つたのである。これは一見するとツリサラグモのようだったが、クモは背面下位に占座している(ツリサラグモは背面上位である)。よく見るとこれはスズミグモの幼体の網であった(図4)。



図4 スズミグモの幼体の網

このように、スズミグモ属の網は一見すると——特に幼体では、大変にサラグモ科の網に似ている。なるほど「サラグモ科からスズミグモ属を経て、コガネグモ科の網へと進化した」という説もここからかと、うなづきたくもなるが、これはあまりにも短絡的にすぎよう。幼体と言えどもスズミグモの網はれっきとしたタテ糸と足場糸(私は、福本(1973)と同じく「こしき糸」と呼びた

いのであるが……）からできており、メッシュを成しているが、サラグモ科の網は不規則である。外見上の類似のみでいうのは危険であろう。私には、南方へ行くとサラ網が少なくなり、そこにサラ網によく似たクモの網があることに、むしろ意味を感じるのである。

○スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* の網の中の網

名護城では、スズミグモがいたる所で観察できる。これらの網をよく見ると、時々一つの網の中に、別の小さな網があることに気付く（図5）。最初、この小さな網はスズミグモの子が作ったものなのではないかと思っていたのだが、よく調べてみるとそうではなく、その網主はスズミグモの幼体であった。



図5 スズミグモの網の中の網

この小さな網に餌を与えたところ、幼体はこの網で捕獲したことから考えて、この網は単に占座する場となっているのではなく、独立した1つの網であると思われた。この時に、大きい方の網主は、小さい網にかかった網に対しては何も反応しなかつたが、これは餌が小さすぎたためかも知れない。

ニューギニアなど南方では、スズミグモはもっとすごい集団を作ることが知られているが、これらはジョロウグモと同じく、迷網の糸を互いにうまく使いあうことに利点があるのだろう。

○ユウレイグモの一一種の網にとまっていた双翅類とそれを捕食する仔グモたち

1983年7月に名護城において、岩のくぼみに網を張っていたユウレイグモの一一種の♀成体をつけた。この網の中には幼体が数頭ほどいたが、また同時に双翅類の一一種が約100匹ほど網の糸に吊り下がつてもいた。

しばらく、この三者を観察していると、仔グモたちは盛んに体を揺らしている。そして、そのそばに双翅類の一一種がとまるとき、素早くその昆虫を捕えて食べているではないか。一頭や二頭ではなく、ほとんど全ての仔グモがそのようにして双翅類を捕えていた。親グモは、その間動きもせずそのまま

まじつとしているだけであった。

クモの網の一部の糸やしおり糸にとまる双翅類がいることは Robinson & Robinson (1976) や Eberhard (1980) などによって報告されているし、また我国の研究者も経験的には知っている。しかし、それらを捕獲するクモがいることは Eberhard (1979) が報告した中南米産の *Argyrodes attenuatus* (このクモは我国に産するオオナガグモ *Ariamnes cylindrogaster* に外見上も、網の形、餌の捕獲法からもそっくりである) を除いて全く知られていない。彼は、このクモが張る網にとまる双翅類を主として捕獲していると述べている。

クモの網や糸にとまる双翅類は、沖縄など南方にみられるだけでなく、関東周辺にも広くみられるので、今後さらに注目してみたいと思っている。

それにしても、これらの双翅類はクモの糸を自然下でどんな方法で見い出しているのだろうか。

○アカアシオニグモ *Neoscona rufofemoratus* の占座姿勢

沖縄の5月は、もう真夏と考えた方がよいだろう。この時期に2回ほど調査を行ったが、アカアシオニグモといって、一見するとヤマシロオニグモによく似たクモに出会う。このクモは垂直円網を張るが、造網環境、網の大きさなど、本州のヤマシロオニグモとそっくりである。ところが、このクモが網のこしき部に占座している姿勢は大変特異である。すなわち、お尻(腹部)を網の反対面につき出して、あたかも、こしきに腰掛けているように見えるのである(図6)。この様子をよ



図6 アカアシオニグモの占座姿勢

く見ると、クモの糸疣からはちゃんと糸が出ており、その上端はこしき糸に附着していることがわかる。このような占座姿勢に、何か適応的な意味があるのか、ないのかは不明だが、垂直円網にこのように腰掛け占座するクモを、私は他に知らない。どなたか他にこのようなことをするクモを御存知の方はいないでしょうか。

○ 1 本のサクラの幼木に造網したクモの個体数

中城公園は那覇市より、国道58号線を名護方面にたどり、途中より折れ普天間市を経てバスで約1時間ほど行った所にある静かな城跡にある（図7）。城（グスクとかグシクという）は、沖縄地方独特のもので、普通に我々が考える「お城」とは全く異なる性格を持つたものである。一般には土豪の住居跡が多いようであるが、集落であつたり、また神の宿る聖地としてのものもある。中城城跡は護佐丸という土豪の館跡であるが、その城壁を成す石組みは驚くほどよくできており、また保存状態も良いので、その美しさは他にも例はなかろう。そして、ここはまた北東方向勝連半島にある、阿摩和利の居城勝連城に向い合って位置し、遠く500年以上昔に起きた、護佐丸と阿摩和利の戦の舞台でもある。この公園を、私は特に気に入っている。初めて沖縄を訪れて以来、毎回必ずここへは来ることにしている。



図7 中城公園（城塁の石門）

公園に入ると、右側に公園の外周に沿うように道が走っている。そして、そのそばに1本の枯れかかったサクラの幼木がこつんと立っていた（図8）。



図8 調査に用いたサクラの幼木（矢印）

高さ 1.6 m で幅はタテ・ヨコそれぞれ 1.4 m くらいあつたが、この狭い木の枝の空間に所狭しとクモたちが網を無数に張っていたのである。このような光景は、私の住む関東では決してみられないものであった。そこで、1983年3月・5月・7月と3回にわたり、このサクラの木に棲むクモの種類と個体数を調べてみることにした。表1はその結果であるが、わずか $1.6 \times 1.4 \times 1.4 = 3 m^3$ の中に70頭～110頭ものクモが網をつくっていた。これらのクモは種類が異っても互いにワク系な

表1 中城公園内の1本のサクラ幼木に造網していたクモ
($1.6 m \times 1.4 m \times 1.4 m = 3.1 m^3$ 中の個体数)

種名	'83. 3	'83. 5	'83. 7
マルゴミグモ <i>Cyclosa vallata</i>	49	76	72
ヘリジロオニグモ <i>Neoscona subpullata</i>	5	10	2
オニグモの一種 <i>Araneus sp.</i>	6	5	0
チブサトゲグモ <i>Gasteracantha mammosa</i>	8	18	14
シロカネグモの一種 <i>Leucauge sp.</i>	1	0	0
合計	69	109	88

どを利用し合い造網することによって、このような高密度での生存を可能にしているのだろう。

クモの生息状態は、餌によって規制されるだけでなく、むしろ足場とか空間によっているという説を時に聞くが、このような状況をみると、この考えも「なるほど」とうなづけるような気もする。

とりとめなく、断片的な観察結果ばかり述べてきたが、読者諸氏の何らかの参考になれば幸いである。

引　用　文　献

- Eberhard, W. G., 1979. *Argyrodes attenuatus* (Theridiidae) : A web that is not a *Psyche*, 86 (4) : 407-413.
- _____ 1980. Spider and fly, play cat and mouse. *Nat. Hist.*, 89 : 56-61.
- 福本伸男, 1973. クモ類の造網動作(1) スズミグモ主網の足場系説について、*Atypus* 60 : 27 - 30.
- Robinson, M. H., 1980. Ecology and behaviour of tropical spiders. *Proc. 8th Int. Arachnol. Congr. (Vienna)* : 13-32.
- Robinson, M. H & B. Robinson 1976. A tipulid associated with spider webs in Papua New Guinea. *Entomologist's monthly magazine*, 112 : 1-4.
- 新海栄一・高野伸二・フィールド図鑑クモ, 1-204. 学研, 東京.

はじめてのクモの飼育～ヤサコマチグモ～

稻葉等代・稻葉茂代

等代（しなよ）は、私、茂代の母で、今年53歳です。ふとしたことから、母はヤサコマチグモを飼育することになりました。1984年の10月20日から、翌年の6月11日まで、8ヶ月間の様子を、母の思い出話のかたちでまとめてみました。

私はクモなど一度も飼つたことがありませんでした。娘が飼っているのを見ているだけでした。ところが、その私が、クモを飼う羽目になってしましました。

1984年10月20日（土）、仏壇のキンモクセイの葉にクモがいるのに気がつきました。娘に見せると早速観察して教えてくれました。巣の中で、親グモが卵を守っているのです。クモはフクログモの仲間ということでした。娘がピンセットで巣を少し開けますと、中にはふ化したばかりの子グモ（1令幼生）数頭と淡黄色の卵が見えました。巣の中の母グモはパニック状態で、子グモは巣のふちからこぼれそうです。娘が急いでガラスの管びんに入れると、すぐに母グモは巣の補修を始めました。穴のところとガラス面をつないで糸をかけ、みるみる穴をふさいでしまいます。幼生が2頭親の糸にからまって身動き出来なくなりましたが、しばらくもがいて自分で糸から離れました。母グモは触肢と口と第3脚で上手に卵を一ヶ所に集めています。管びんのガラス面に近い方に幼生が、葉面に近い方に卵が集められ、母グモはその中間で両方を気づかっています。

10月21日（日）、朝9時頃、巣内の幼生は18頭確認できました。補修した穴の部分の糸が薄いのでガラス面を通して巣内が見えるのです。巣の外に出てしまった幼生が1頭外側から巣につかまっています。

10月22日（月）、穴の部分に毎日内側から糸がかけられるので、中は見えにくくなってきました。外に出ていた幼生は管びんの下の方で死んでいます。

10月25日（木）、巣の一ヶ所に穴があいています。1頭巣の外に出ています。

10月26日（金）、幼生の脚が黒っぽくなっているのに気がつきました。娘に話すと確認してくれて、脱皮して2令になったのだろうということでした。

10月29日（月）、朝7時頃見ると、母グモが巣から出ています。8時45分に見たときには、子グモ（2令幼生）が巣から出て、管びんの中を歩きまわっていました。「まどい」をしているようにはみえません。9時半、歩きまわっている子グモは2、3頭で、との子グモは管びんの下の方に集まっています。11時半、母グモはしきりに腹部を振りながら糸を出します。ある程度の糸が張れると、内で身づくりをして休んでいます。夕方、母グモが昼間作った簡単な住居は壊れていて、母子ともに管びんの中を歩きまわっています。

10月30日（火）、娘が学校へ持っていました。ふ化した数は21頭だそうです。うち3頭は途中で死んで、18頭が生きています。巣の糸にからんでいた卵が数個あったそうです。11時、与えたショウジョウウバエ2頭を母グモはすぐに食べ、続いて与えた3頭の内1頭を食べたとか。夕方、娘が幼

生を外へ逃がすと言つて持ち帰つてきました。外に出しては寒くて死んでしまいます。それではかわいそうです。娘に飼つてあげようと話すと「無理だよ。生き餌しか食べられないから」と言います。「それでも」とねばると、「幼生にはショウジョウバエは大きすぎる。羽を取つて動けなくしてみたら」と娘が言います。

11月1日(水)、ショウジョウバエの腹部を爪楊枝でつついで半殺しにしたものを与えた後、子グモはとびついで夢中で食べました。夕方、帰宅した娘に「食べたよ」と話すと、びっくりしていました。

11月9日(木)、他の子グモと餌を争つて共食いしてしまったものもあります。5日には9頭に減り、9日には4頭に減りました。それぞれ別の小さな管びんに移して飼育することにしました。小箱に管びんを納めて居間のテーブルの上におきました。餌にするショウジョウバエはコーヒーの空きびんにバナナを入れて飼いました。「水を与えないといちで死んでしまう」と聞いたので、朝、餌をやる前に、綿棒に水を含ませて管びんの内面をふいてやります。すると小さな水たまりができます。そこへクモが来て水を飲みます。

11月12日(日)、昨夜から今朝にかけて1頭が脱皮しました。3令になつたわけです。頭胸部と脚は透けるようなグレーで、腹部は赤味がかった黄色です。脱皮前と体色はさほど変わりません。

11月13日(月)、夕方5時頃見ると、また1頭が脱皮していました。幼生はとても動くのが早く、水や餌をやるときに逃げてしまって、2令で2頭逃げられてしまい、残つた2頭が3令になつたわけです。半殺しにしなくともショウジョウバエを採れるようになりました。

3令のときに、子グモはまた1頭逃げてしまって、とうとう1頭だけになつてしましました。この1頭は11月27日、12月17日、12月30日、1月14日と各々脱皮を繰り返して、成体になりました。巣から出てから5回の脱皮をして、7令で成体となつたのです。働きに出ていませんでしたので、6時から23時頃まで居間は螢光灯で照明してありましたし、室温もかなり高かった(30℃以上)ので、どんどん成長したのかもしれません。餌は毎日あげました。少しづつ増やしてやりました。クモは触肢の先がふくらんでいるので、オスだということです。成体の体長は娘によると、約5mmということでした。管びんは糸や餌のカスで汚れるので2日に一度、新しくしてやりました。管びんの中にドーム型の住居を作り、そのふちにいて、餌をやると、そこから出てきて捕食していました。よくもまあ、こんなにたくさんの糸を出すものです。びんを毎日交換しなかつたのは、餌をまず先に殺しておいて、後で食べることに気づいたからです。成体では1日に5,6頭を管びんに入れてやりました。母グモは11月30日に死んでしまい、液浸して、娘が学校へ持つていきました。「熊田憲一さんに見ていただいたところ、ヤサコマチグモというクモだった」と言つていました。名前がわかつてうれしい気がいたします。

せつかく親になつたのですから、お嫁さんを探してあげないとかわいそうです。娘も気にしてメスを探してくれましたが、見つかりません。また、せまい管びんの中に一日いるのでは運動不足になつてしまうのではないかでしょうか。そこで一辺が80cm位のコタツ板のふちを端から端まで、毎日散歩させました。クモは幼生のときに比べると、ずっと歩くのが遅く、しかも板のふちをまっすぐに進んでいきます。コタツ板の端で管びんを持ち構えていて、そこに入れられるのです。

5月頃になりますと、だんだんクモがやせてきました。餌をあげると食べてはいるのですが、全部食べずに残すようになりました。

6月11日（火）、朝は生きていましたが、夕方、とうとう死んでしまいました。死ぬ前にお尻から白い液体を出しました。それで、腹部はべっちょんこになってしましました。

死ぬ10日程前から、管びんの真中にドーム型ではなく、複雑な網を作つてそこにじつとしていました。「こがれ死にしたんじゃないのかしら」と娘に話しました。

これで母の飼育は終わりました。今母は、死ぬとかわいそだから、もうクモは飼わないと言っています。とはいいうものの、かなりの長い間、母に面倒な飼育をさせたものはクモの子を擬人的にみてしまう心と、そう思わせるクモのかわいらしさだったのではないかと、私は思っています。

最後になりましたが、メモを見て、まとめと助言をして下さった池田博明氏に感謝いたします。

ハネグモ跳ねた

熊田憲一

1982年7月28日午前0時10分頃、机の上を歩いている小さな虫が目についた。持っていた鉛筆の先でちょっとついたらピョンと跳ねた。“まさか机の上にトビムシが上ってくることはないし、ひょっとしてハネグモではないか。”といそいでルーペで見てみると、頭胸部に歌舞伎の隅取よろしく斑紋のあるオキツハネグモ *Orchestina okitsui* Oi, 1958 だった。“これはおもしろい”と再び鉛筆でつつくとピョンと跳ね逃げる。ハネグモと呼ばれ、昆虫のハナノミやトビハムシのように後脚（クモの場合第4歩脚）がすばらしく太いこのクモがどのくらい跳ぶのか試してみたり、さっそくクモを紙の上に追い上げた。鉛筆でついた際に下の紙に印をつけ、跳ねて着地した場所にも素早く印をつけた。つつく時は鉛筆の先が触れてクモが跳ぶため正確な点が打てるのだが、着地が問題である。すぐに動かれると確実な着地点に印をつけるのは難しいのだが、この観察では動いてもゆっくり歩く程度だったのでほとんどずれることはなかった。

記録のはじめはどのくらいの間をおいて跳ぶのか予測がつかなかったので、やたらとつついてしまつたが、やはりタイミングがあるようだ。着地後すぐにつづくと鉛筆の先に押されてズッてしまうこともあった。しばらく紙の上に点を打ち線をつないでいたが、クモは結構元気でよく跳ねた。そこで100回跳ばせたらどうなるかと新しい紙に替えて記録することにした。だいぶつつき方がなれたので10分ほどの間に93回の記録をとることができた（試技中数え違いをしてしまい100回にならなかつた）。この跳躍記録をまとめたものが図-1である。最短5mmから最長25mm、平均16.5mm、最高計測数値16.5mmであった。1回目とあわせて15分ほどの間に150回近く跳んでいるので、回数が増すにつれて距離が落ちるかと思っていたが、案外そうでもなくばらつきがあった。さすが93回を数えた時はその微少な体に秘められたエネルギーに感心してしまつた。もちろんこれはクモがその気になって跳んだわけではないので、この数値をもってオキツハネグモの最短値や最長値を検討することはむずかしい。しかし1.5mmにもみたないこのクモが最長体長の15倍以上の距離を跳ね、かつ93回で合計1552.0mmも跳んだわけで、なんと体長の1035倍も先に行つたことになる。身長170cmの人間に換算して最長25mを跳ね、10分間で17,590m進んだことになる。時速にして10km/h、ちょっとしたマラソンである。クモとしてはウサギ飛びだったかも知れず、とんだ災難だったと思う。

なお、跳ねる時にはクモはしおり糸を引いていたかは気をつけていなかったので不明である。自然界ではリターの中や樹上より見つけることができるが、今回のように室内にも現われ、かつて室内性のクモと言われたこともあった。

今回このクモがこのように刺激に反応してよく跳ぶことがわかつた。しかし通常このような動作をするとは思われない。先に述べたハナノミやトビハムシなどの昆虫類も立派な後脚を持っているにもかかわらず、常に飛びはねているわけではないと同様に、このクモも通常は歩いているのだが、危険や特別な時に身を守るためになどで跳ねるので推測された。

真夜中のお遊び気分につきあつてもらったオキツハネグモは、顕微鏡下で再度同定したのち、本棚の裏のすき間に解放した。

図1 オキツハネグモの飛躍実験記録

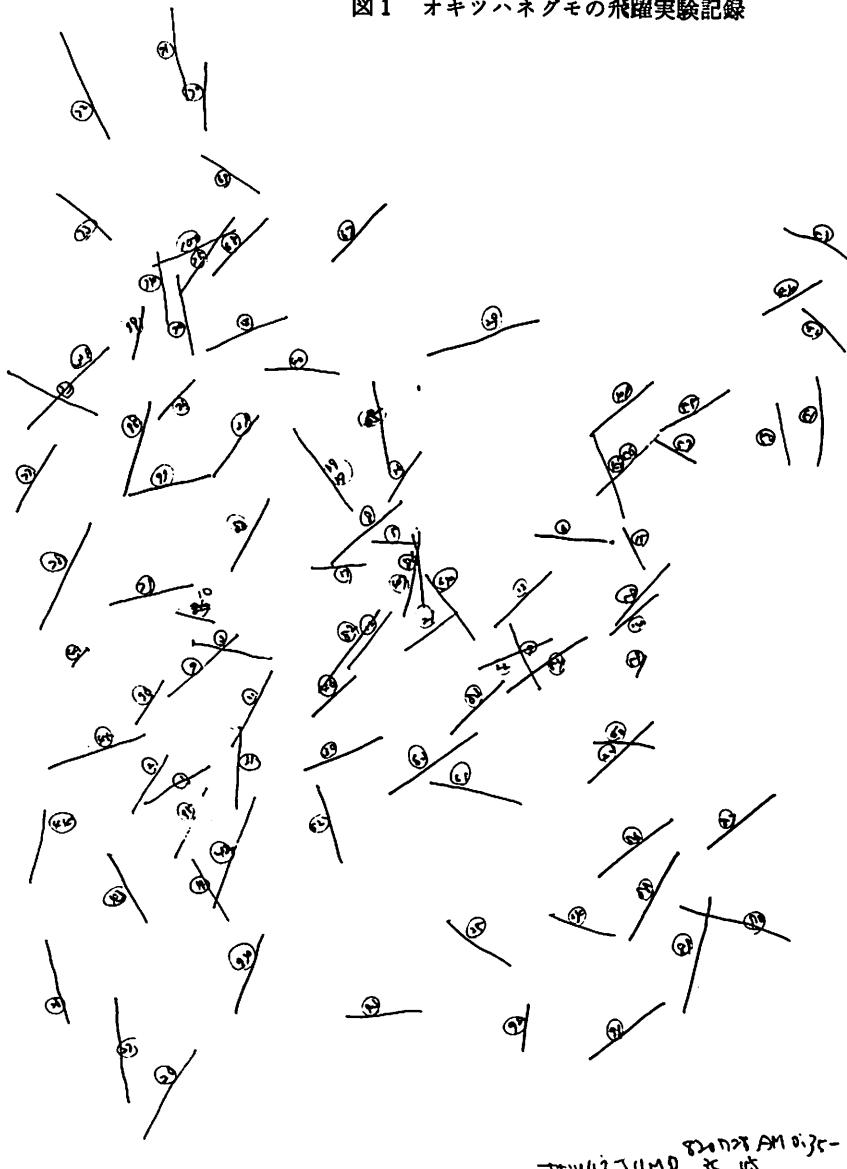
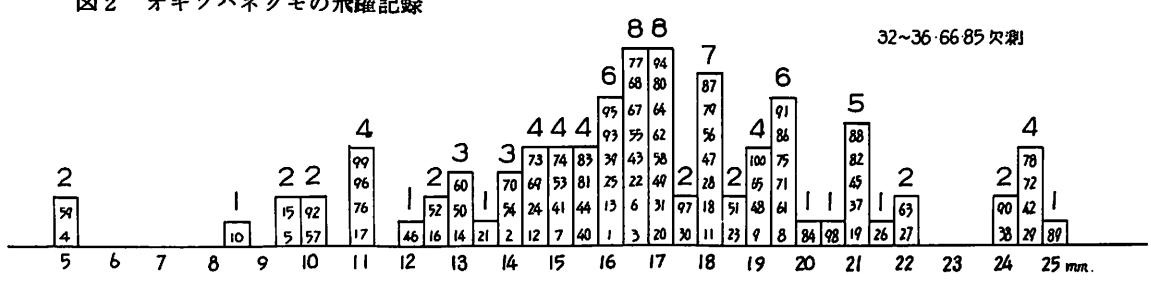


図2 オキツハネグモの飛躍記録



東京蜘蛛談話会 昭和58年度 観察採集会報告

広徳寺周辺のクモ

熊田憲一・加藤輝代子

昭和58(1983)年度の談話会観察採集会は、東京都の西部・五日市町小和田の広徳寺周辺で行なった。

五日市町は陣馬・秋川・奥多摩と続く山波の中域に位置し、山地特有の自然を有している。今回の対象地域となった広徳寺周辺も小範囲の中に人家・河川・山地がみられ、変化に豊んだ環境を有する地域であった。広徳寺は国鉄武蔵五日市駅から徒歩で約20分、五日市の町並みを抜け、秋川を渡った丘陵にある臨済宗建長寺派に属する名刹で、応安6年(南北朝時代の1373年)に創建された古い寺である。現在東京都の文化財にも指定されている。

年間を通しての観察・採集は秋川にかかる小和田橋からはじめ、広徳寺参道・広徳寺裏山と進み、人家・畠地を抜け、秋川の川沿いをたどり再び小和田橋に出る。といったコースをとった。(その他として、五日市駅に向う道でも人家の生垣などを観察の対象とした) コース内には、広徳寺の立派な山門や大イチョウ・本堂・モリアオガエルの棲む池・タラヨウの大木・都の記念物にもなっているカヤの大木・竹ヤブ・墓地・桑畠・畠地・荒地・草地・林・崖・人家がみられた。なお、広徳寺境内での採集は禁止されているので、境内では観察のみにとどめた。

観察採集日と参加者(敬称は略す)

第1回(春) 1983年5月15日

池田博明・梅林 力・加藤輝代子・萱嶋 泉・佐藤幸子・鳩田順一・高橋 登

計7名(この日の参加者名簿に不備がありました。記録されていない方は連絡して下さい)

第2回(夏) 1983年7月24日

池田博明・井上房枝・梅林 力・小沢実樹・佐藤幸子・高橋 登・松浦祐司・加藤輝代子・熊田憲一

このほか会員外参加7名、計16名

第3回(秋) 1983年10月16日

池田博明・井上房枝・佐藤幸子・高野伸二・高野ツヤ子・高橋 登・松浦祐司・
加藤輝代子・熊田憲一

このほか会員外西條雄介君親子4名、計13名

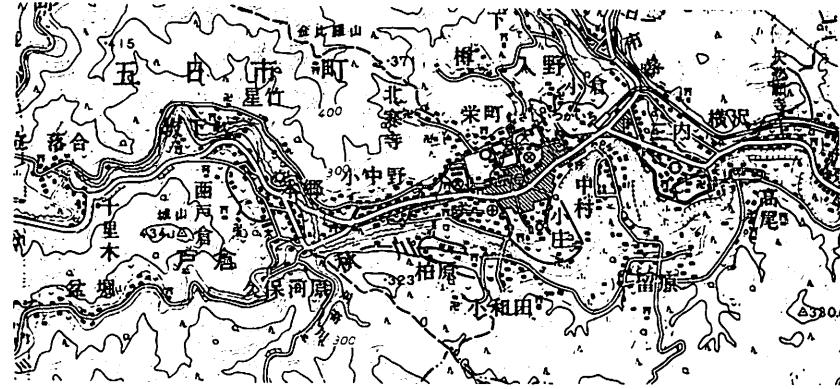
第4回(冬) 1984年2月19日

池田博明・梅林 力・佐藤幸子・高橋 登・蓮沼克己・松浦祐司・熊田憲一、計7名



7月24日 10月16日

2月19日 広徳寺は小和田の地名左の印



目録および四季別種類一覧表

この目録は当日の参加者が確認した種を加藤・佐藤幸子氏・熊田が記録し、それに熊田が標本を同定した結果をまとめたものである。

一覧表に使用した記号は次のとおりである。M(雄成体)、F(雌成体)、m(雄成体)、f(雌幼体)、y(幼体雌雄不明)、e(卵のう)、○(確認記録のみ)、-(確認せず)

			5月	7月	10月	2月
1.	Antrodiaetidae					
1.	<i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコトタテグモ	-	-	○	○
2.	Ctenizidae					
2.	<i>Ummidia flagaria</i>	キノボリトタテグモ	-	F	○	f
3.	Atypidae					
3.	<i>Atypus karschi</i>	ジグモ	-	○	○	○
4.	Calommata signatum	ワスレナグモ	-	-	○	-
4.	Amaurobiidae					
5.	<i>Titanoeca albofasciata</i>	ヤマトガケジグモ	-	-	○	-
5.	Uloboridae					
6.	<i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	-	F	○	-
7.	<i>Uloborus varians</i>	ウズグモ	-	-	○	-
6.	Segestriidae					
8.	<i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	-	○	-	○
7.	Pholcidae					
9.	<i>Pholcus cnypticolens</i>	ユウレイグモ	○	○	y	f
8.	Theridiidae					
10.	<i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	y	○	○	-
11.	<i>A. culicivora</i>	ニセソヒメグモ	-	○	My	-
12.	<i>A. japonica</i>	ヒメグモ	○	MFy	y	-
13.	<i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	F	F	mF	○
14.	<i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	-	-	○	-
15.	<i>Argyrodes cylindrogaster</i>	オナガグモ	○	F	○	-
16.	<i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	○	MF	F	-
17.	<i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	○	F	-	-
18.	<i>A. saganus</i>	ヤリグモ	○	MFy	y	y
19.	<i>Chrysso argyrodiiformis</i>	オダカグモ	-	○	-	-
20.	<i>C. punctifera</i>	ホシミドリヒメグモ	○	○	○	m f
21.	<i>C. venusta</i>	コガネヒメグモ	-	F	-	y
22.	<i>Coleosoma octomaculatum</i>	ヤホシヒメグモ	-	-	-	y

			5月	7月	10月	2月
23.	<i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジングモ	-	-	-	y
24.	<i>Enoplognatha transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	-	○	-	-
25.	<i>Episinus nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	-	F	○	-
26.	<i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	-	-	○	-
27.	<i>Theridion chikunii</i>	バラギヒメグモ	M	-	○	-
28.	<i>T. latifolium</i>	ヒロハメグモ	MF	-	○	-
29.	<i>T. sp.</i>	キヨヒメグモ	-	○	-	-
	9. Linyphiidae					
30.	<i>Arcuphanes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	-	-	○	-
31.	<i>Labulla contortipes</i>	アシヨレグモ	○	○	-	-
32.	<i>Linyphia oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	M	M	y	-
33.	<i>L. fusca</i>	クスミサラグモ	○	-	○	-
34.	<i>L. japonica</i>	ツリサラグモ	F	-	○	-
35.	<i>L. nigripectoris</i>	ムネグロサラグモ	-	○	-	-
36.	<i>L. longipedella</i>	アシナガサラグモ	○	Fy	-	-
37.	<i>L. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	○	-	-	-
38.	<i>Asperthorax communis</i>	ザラアカムネグモ	-	-	F	-
39.	<i>Gonatium arimaense</i>	アリマケズネグモ	-	-	F	-
40.	<i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	-	○	-	-
	10. Mimetidae					
41.	<i>Ero japonica</i>	センショウグモ	-	F	-	○
	11. Anapidae					
42.	<i>Conoculus lyugadinus</i>	ヨリメグモ	-	○	-	-
	12. Mysmenidae					
43.	<i>Mysmenella jobi</i>	ナンブコツブグモ	-	○	-	-
	13. Araneidae					
44.	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	○	-	○	-
45.	<i>Araneus ishikawai</i>	イシサワオニグモ	○	○	-	-
46.	<i>A. ventricosus</i>	オニグモ	○	y	○	○
47.	<i>A. punctigera</i>	コゲチャオニグモ	-	○	○	-
48.	<i>A. abscissus</i>	キザハシオニグモ	-	-	○	-
49.	<i>A. ejusmodi</i>	ヌサオニグモ	○	-	y	-
50.	<i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	-	f	○	-
51.	<i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	○	F	-	f
52.	<i>A. viperifer</i>	カラオニグモ	-	-	m	-
53.	<i>A. viridiventris</i>	ハラビロミドリオニグモ	-	y	-	-

		5月	7月	10月	2月
54.	<i>A. sp.</i>	マメオニグモ	○	-	-
55.	<i>Araniella sp.</i>	ハナオニグモ	○	○	○ mf
56.	<i>Neoscona fuscocolorata</i>	ヤミイロオニグモ	○	○	f f
57.	<i>N. mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	-	m	-
58.	<i>N. scolloides</i>	サツマノミダマン	-	m	-
59.	<i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	○	○	y
60.	<i>Yaginumia sia</i>	ズグロオニグモ	-	-	○
61.	<i>Singa hamata</i>	ナガテオニグモ	-	-	F
62.	<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ	-	○	MF
63.	<i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	-	-	○
64.	<i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	○	y	y
65.	<i>Argiope boesenbergi</i>	チュウガタコガネグモ	-	F	e
66.	<i>A. bruennichii</i>	ナガコガネグモ	-	y	○
67.	<i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	○	○	F ○
68.	<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	-	○	-
69.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	○	Mf	○
70.	<i>C. japonica</i>	ヤマトゴミグモ	-	f	-
71.	<i>C. laticauda</i>	キジロゴミグモ	○	-	-
72.	<i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	○	○	y
73.	<i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	○	○	○
74.	<i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ	-	f	-
75.	<i>C. inaequalis</i>	オオトリノフンダマシ	-	f	Fe
76.	<i>C. nagasakiensis</i>	シロオビトリノフンダマシ	-	○	-
77.	<i>Paraplectana tsushimaensis</i>	ツシマトリノフンダマシ	-	F	-
78.	<i>Gasteracantha kuhlii</i>	トゲグモ	-	f	-
79.	<i>Larinia argiopiformis</i>	コガネグモダマシ	-	-	○ y
80.	<i>Meta reticuloides</i>	ヤマシドヨウグモ	-	-	○
81.	<i>Metleucauge yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	-	-	y
82.	<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	○	f	○ ○
	14. Theridiosomatidae				
83.	<i>Ogulnius pullus</i>	ヤマジグモ	-	○	y
84.	<i>Theridiosoma epeirooides</i>	カラカラグモ	-	○	-
	15. Tetragnathidae				
85.	<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	-	F	-
86.	<i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	○	MF	y
87.	<i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ	-	○	-

			5月	7月	10月	2月
88.	<i>Menosira ornata</i>	キンヨウグモ	—	—	F	—
89.	<i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ	—	○	○	y
90.	<i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ	○	M	○	y
	16. Urocteidae					
91.	<i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	○	○	○	○
	17. Agelenidae					
92.	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	○	m	○	○
93.	<i>A. opulenta</i>	コクサグモ	○	f	○	—
94.	<i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ	—	○	MFy	M
95.	<i>C. exitialis</i>	ヤチグモ	—	○	MFy	—
96.	<i>C. luctuosus</i>	メガネヤチグモ	—	○	M	—
97.	<i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	—	—	F	—
	18. Pisauridae					
98.	<i>Dolomedes pallitarsis</i>	スジブトハシリグモ	—	○	○	—
99.	<i>D. saganus</i>	スジアカハシリグモ	○	y	—	—
100.	<i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	○	F	f	y
101.	<i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ	—	○	f	—
	19. Lycosidae					
102.	<i>Pardosa astrigera</i>	ウヅキコモリグモ	○	M	○	m
103.	<i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	○	Fe	m	—
104.	<i>Pirata clercki</i>	クラークコモリグモ	—	—	—	mf
	20. Oxyopidae					
105.	<i>Oxyopes badius</i>	クリチャササグモ	—	—	y	y
106.	<i>O. sertatus</i>	ササグモ	—	○	○	○
	21. Thomisidae					
107.	<i>Bassaniana decorata</i>	キハダカニグモ	—	—	—	m
108.	<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスグモ	—	○	y	mf
109.	<i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	○	○	f	—
110.	<i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	○	○	M	—
111.	<i>Oxyptila nipponica</i>	ニッポンオチバカニグモ	—	○	—	—
112.	<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	○	○	f	—
113.	<i>Synaema globosum</i>	フノシグモ	○	○	—	—
114.	<i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ	—	—	m	—
115.	<i>T. rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	—	○	—	y
116.	<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	○	—	m	—
117.	<i>X. saganus</i>	オオヤミイロカニグモ	—	F	—	—

5月 7月 10月 2月

	22. Salticidae				
118.	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	-	○	○ y
119.	<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	○	○	Fy -
120.	<i>Hasarius doenitzi</i>	デニッツハエトリ	○	F	○ -
121.	<i>Icius difficilis</i>	マガネアサヒハエトリ	-	○	- -
122.	<i>I. linea</i>	メガネアサヒハエトリ	-	-	y -
123.	<i>Jotus abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	-	-	- ○
124.	<i>Myrmarachne japonica</i>	アリグモ	-	M	○ ○
125.	<i>Plexippus setipes</i>	ミスジハエトリ	-	○	- -
126.	<i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	-	○	- y
127.	<i>Synagelides agoriformis</i>	アメイロハエトリ	-	-	- ○
	23. Philodromidae				
128.	<i>Philodromus flavidus</i>	キエビグモ	-	-	- y
129.	<i>P. spinifitarsis</i>	キハダエビグモ	MF	-	- ○
130.	<i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	○	○	○ y
131.	<i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	○	○	○ -
132.	<i>Thanatus nipponicus</i>	ヤマトヤドカリグモ	-	-	f -
133.	<i>T. miniaceus</i>	ヤドカリグモ	-	F	- -
	24. Clubionidae				
134.	<i>Chiracanthium eutiththa</i>	アシナガコマチグモ	-	○	- -
135.	<i>C. japonicum</i>	カバキコマチグモ	-	○	y -
136.	<i>Clubiona vigil</i>	ムナアカフクログモ	○	-	- y
137.	<i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	-	-	Fy -
	25. Anyphaenidae				
138.	<i>Anyphaena pugil</i>	イズツグモ	-	-	y F
	26. Heteropodidae				
139.	<i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	○	○	y -
	27. Ctenidae				
140.	<i>Anahita fauna</i>	シボグモ	○	-	○ ○
	29. Gnaphosidae				
141.	<i>Gnaphosa kompirensis</i>	メキリグモ	-	M	f -

5月. 15科55種、7月. 24科95種、10月. 24科92種、2月. 18科44種、総計29科141種。

東京蜘蛛談話会 観察採集会報告 1985年春～1986年冬

高麗山のクモ

池田博明

本報告は東京クモ談話会の季節ごとの調査の第9回目の記録である。調査地は、神奈川県平塚市にある標高167mの高麗(こま)山である。高麗山は県の指定保護区域となっている。南には相模湾を望み、西は湘南平につながる。

毎回、10時に大磯駅集合、平塚方面行きバスで「花水」下車、約11時前後から昼食をはさんで、午後4時頃まで調査した。5月と7月は山頂近くの大社建設予定地まで上ったが、10月と2月はそこまで上らず、南面の山麓付近を徹底調査した。平塚クモの会の平塚地域のクモ相調査と重なったため、参加者が増えたことが幸いであった。また、疑問種の一部は平塚市博物館に保存し、新海栄一氏に同定していただいた。平塚クモの会の調査報告はすでに発表されており、それには今回の報告と重複しているところがある。

原則として、同定確認は調査参加者が、当日その場で行った。2月の標本について、谷川明男・松浦祐司氏が記録をお寄せ下さった。

種リストの和名・学名は、八木沼健夫『原色日本クモ類図鑑』(1986年、保育社)にあわせてある。違っているところは後述する。

□調査日および採集観察者

第1回： 1985年5月12日(日)

池田博明・稻葉茂代・大野悟・佐藤幸子・日下部光代・新海栄一・熊田憲一・
高田登・蓮沼克己・木藤幸雄・谷川明男・松浦祐司・五味秀人・浜口哲一(談話会員)
日下清文・佐藤伸一・佐藤信恵・佐保田浩(平塚クモの会)
青野和子・井上美樹・植田恭子・杉崎るり(小田原城内高校)
磯部達男・加藤剛・丹野信吾(平塚江南高校) 計25名

第2回： 1985年7月14日(日)

浅間茂・池田博明・稻葉茂代・大野悟・貞元巳良・佐藤幸子・新海栄一・高橋登・
立川晴二・松浦祐司(談話会員)
日下清文・佐藤伸一(平塚クモの会)
青野和子・高橋祐子(城内高校)
磯部達男・小沢俊夫・川崎博孝(平塚江南高校) 計17名

第3回： 1985年10月13日(日)

池田博明・稻葉茂代・大野悟・五味秀人・佐藤幸子・新海栄一・高橋登・谷川明男
(談話会員)

日下清文(平塚クモの会)

福田光恵・宮川佳子・渡辺英之(日大動植物研究会)

池田 泉・池田千洋(児童)

計14名

第4回： 1986年2月16日(日)

浅間 茂・池田博明・板倉泰弘・新海栄一・高橋 登・田副幸子・谷川明男・松浦祐司

佐藤伸一・佐藤信恵(平塚クモの会) (談話会員)

宅見 啓・青木和代・井上美樹・植田恭子・高橋祐子・渡辺秀子(城内高校)

計16名

□四季別一覧表

略号はF(メス成体)、f(メス亜成体)、M(オス成体)、m(オス亜成体)、y(幼体)、E(卵のう)、-(確認なし)を表す。

5月 7月 10月 2月

	1. Antrodiaetidae				
1.	<i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコトタテグモ	y	FMy	-
2.	<i>Ctenizidae</i>				F
2.	<i>Latouchia typica</i>	キシノウエトタテグモ	Ff	FMy	y
3.	<i>Ummidia flagaria</i>	キノボリトタテグモ	Ff	y	y
3.	<i>Atypidae</i>				FMy
4.	<i>Atypus karschi</i>	ジグモ	y	y	y
5.	<i>Calommata signatum</i>	ワスレナグモ	y	y	y
5.	<i>Dictynidae</i>				-
6.	<i>Lathys punctosparsa</i>	ナシジカレハグモ	-	-	-
5.	<i>Uloboridae</i>				F
7.	<i>Uloborus sybotides</i>	カタハリウズグモ	FMy	FE	y
8.	<i>U. varians</i>	ウズグモ	y	-	-
6.	<i>Oecobiidae</i>				y
9.	<i>Oecobius annulipes</i>	チリグモ	-	-	y
7.	<i>Segestriidae</i>				m
10.	<i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	-	-	y
8.	<i>Oonopidae</i>				Fy
11.	<i>Ischnothyreus narutomii</i>	ナルトミダニグモ	-	-	-
9.	<i>Theridiidae</i>				M
12.	<i>Achaeareana japonica</i>	ヒメグモ	-	y	Ey
13.	<i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	FMy	MfEy	M
14.	<i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	F	-	y
15.	<i>Coleosoma octomaculatum</i>	ヤホシヒメグモ	-	-	Ey
					m

			5月	7月	10月	2月
16.	<i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	M	FM	-	-
17.	<i>A. cylindrogaster</i>	オナガグモ	fM	FMEy	my	y
18.	<i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	y	FM	-	-
19.	<i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	y	FE	y	FM
20.	<i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジングモ	-	FMm	y	-
21.	<i>D. flavomarginata</i>	キベリミジングモ	Fy	-	-	-
22.	<i>D. mustelina</i>	カニミジングモ	-	m	y	y
23.	<i>D. mutilata</i>	コアカクロミジングモ	y	-	-	-
24.	<i>Enoplognatha transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	FEy	FE	y	Fy
25.	<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	-	y	-	y
26.	<i>Steatoda cavernicola</i>	ハンゲツオスナキグモ	-	-	-	F
27.	<i>Stenmops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	Fm	-	my	-
28.	<i>Theridion sterninotatum</i>	ムナボシヒメグモ	y	M	f	y
	10. Linyphiidae					
29.	<i>Aprifrontalia mascula</i>	コサラグモ	FM	-	-	-
30.	<i>Arcuphanthes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	FM	-	-	FM
31.	<i>Bathyphantes tateyamaensis</i>	タテヤマテナガグモ	-	-	y	M
32.	<i>Doenitzius parvus</i>	コデーニッサラグモ	F	-	-	-
33.	<i>D. peniculus</i>	デーニッサラグモ	-	-	-	F
34.	<i>Linyphia oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	Fm	FM	-	FMy
35.	<i>L. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	F	-	-	-
36.	<i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	FM	-	-	Fy
37.	<i>Ummeliata insecticeps</i>	セスジアカムネグモ	-	M	-	-
38.	<i>Walckenaeria vulgaris</i>	テングヌカグモ	-	-	-	FM
	11. Mimetidae					
39.	<i>Ero japonica</i>	センショウグモ	my	FE	y	y
	12. Araneida					
40.	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	Ffm	FE	y	-
41.	<i>Araneus ventricosus</i>	オニグモ	F	y	y	-
42.	<i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	-	y	F	-
43.	<i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	F	F	y	-
44.	<i>A. viperifer</i>	カラオニグモ	F	-	-	-
45.	<i>Neoscona mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	-	y	-	-
46.	<i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	y	fy	-	-
47.	<i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	y	Mf	-	-

			5月	7月	10月	2月
48.	<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ	—	—	y	—
49.	<i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	F	F	y	—
50.	<i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	F	—	—	—
51.	<i>Argiope minuta</i>	コガタコガネグモ	—	y	F	—
52.	<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	—	M	—	—
53.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	y	y	—	—
54.	<i>C. insulana</i>	シマゴミグモ	—	FMy	—	—
55.	<i>C. monticola</i>	ヤマゴミグモ	F	—	—	—
56.	<i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	F	—	y	y
57.	<i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	FM	y	y	—
58.	<i>Meta reticuloides</i>	ヤマジドヨウグモ	—	y	y	—
59.	<i>Metleucauge yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	F	—	y	—
60.	<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	—	y	FM	—
13. Tetragnathidae						
61.	<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	y	—	F	y
62.	<i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	y	f	—	y
63.	<i>Tetragnatha maxillosa</i>	ヤサガタアシナガグモ	y	—	—	—
64.	<i>T. praedonia</i>	アシナガグモ	y	—	—	y
65.	<i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ	—	M	—	y
14. Urocteidae						
66.	<i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	F	Fm	F	F
15. Agelenidae						
67.	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y	y	F	Fy
68.	<i>A. opulenta</i>	コクサグモ	y	y	F	—
69.	<i>Cicurina japonica</i>	コタナグモ	—	—	—	FM
70.	<i>Coelotes exitialis</i>	ヤチグモ	—	—	—	F
71.	<i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	F	—	M	FM
72.	<i>C. corasides</i>	ヤマヤチグモ	y	fy	y	Fy
16. Pisauridae						
73.	<i>Dolomedes sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	y	Fy	y	—
74.	<i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ	—	—	—	y
17. Lycosidae						
75.	<i>Pardosa astrigera</i>	ウツキコモリグモ	—	—	—	my
76.	<i>P. brevipulva</i>	ヤマハリゲコモリグモ	FE	—	—	—
77.	<i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	FE	—	y	—

			5月	7月	10月	2月
78.	<i>Pirata procurvus</i>	チピコモリグモ	—	M	y	—
79.	<i>Trochosa ruricola</i>	アライトコモリグモ	—	—	F	—
	18. Oxopidae					
80.	<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ	y	—	y	y
	19. Thomisidae					
81.	<i>Bassaniiana decorata</i>	キハダカニグモ	y	y	—	—
82.	<i>Boliscus tuberculatus</i>	イボカニグモ	—	—	fy	—
83.	<i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	—	My	—	—
84.	<i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	Ff	—	y	y
85.	<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスグモ	—	—	—	Fy
86.	<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	—	y	—	—
87.	<i>Pistius undulatus</i>	ガザミグモ	F	y	—	—
88.	<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	—	—	—	y
89.	<i>Tmarus rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	y	FE	—	y
90.	<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	fM	M	y	y
	20. Philodromidae					
91.	<i>Philodromus auricomus</i>	キンイロエビグモ	fy	—	—	y
92.	<i>P. spinitarsis</i>	キハダエビグモ	f	y	y	f
93.	<i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	y	FM	y	y
94.	<i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	f	Fy	y	y
95.	<i>Thanatus miniaceus</i>	ヤドカリグモ	y	—	—	—
	21. Salticidae					
96.	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	FMm	—	f	F
97.	<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	FM	F	FM	—
98.	<i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	y	Ff	y	—
99.	<i>H. pullus</i>	キレワハエトリ	y	—	—	—
100.	<i>Helicius</i> sp.	シャバラハエトリ	y	—	y	—
101.	<i>Lauferia aenea</i>	エキスハエトリ	y	F	—	—
102.	<i>Marpissa pulla</i>	ヨダンハエトリ	FMy	FM	y	—
103.	<i>Menemerus confusus</i>	シラヒゲハエトリ	—	—	y	—
104.	<i>Myrmarachne inermichelis</i>	ヤサアリグモ	f	y	y	—
105.	<i>M. japonica</i>	アリグモ	F	FM	y	y
106.	<i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	y	FM	My	y
107.	<i>Plexippoides doenitzii</i>	デーニッツハエトリ	FM	Fy	FM	—
108.	<i>Plexippus paykulli</i>	チャスジハエトリ	m	—	—	—

			5月	7月	10月	2月
109.	<i>P. setipes</i>	ミスジハエトリ	F f	FM	—	FM
110.	<i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	FMy	FM	y	y
	22. Clubionidae					
111.	<i>Chiracanthium eutittha</i>	アシナガコマチグモ	My	—	y	y
112.	<i>C. lascivum</i>	ヤマトコマチグモ	—	F	y	—
113.	<i>Clubiona kurilensis</i>	ヒメフクログモ	—	—	—	M
114.	<i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	f	FE	y	y
	23. Liocranidae					
115.	<i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	F	f	—	—
116.	<i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	—	—	—	M
117.	<i>P. nipponicus</i>	ウラシマグモ	y	—	y	—
118.	<i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	y	FM	y	—
119.	<i>P. sp.</i>	ウラシマグモの一種	FM	F	—	—
120.	<i>Trachelas japonicus</i>	ネコグモ	f	—	—	FMy
	24. Heteropodidae					
121.	<i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	—	—	y	y
	25. Ctenidae					
122.	<i>Anahita fauna</i>	シボグモ	m	y	y	y
	26. Gnaphosidae					
123.	<i>Drassodes serratidens</i>	トラフワシグモ	—	—	—	y
124.	<i>Zelotes asiaticus</i>	クロチャケムリグモ	—	F	—	—
		計	83	69	67	63
		種	種	種	種	種

和名についてはヤチグモをクロヤチグモとしていない。科についてはウエムラグモ科を認めている。

7月14日の採集会の記録（城内高校1年・高橋祐子）。

まず、10時20分から12時15分まで採集をしました。私たちははっきり言うと、クモを見ても何もわかりません。だから、何でも見つけると、だれかのところへ持って行って名前を教えていただきました。申し訳ないことに、そのとき教えていただいたクモもかなり忘れてしました。でも、イオウイロハシリグモや、シャコグモ（かわいい名前なので覚えています）、アオオニグモやデーニッシュハエトリグモなど、覚えているものも少々あります。ジョロウグモの網をつつつくと「ぶんぶん」ふるえることも覚えました。アオオニグモが、網からちょっと離れたところで獲物がかかるのを待っていて、振動が伝わると「すすーっ」とすごい早さで出てくることや、ハエトリグ

モがジャンプをすることも！足の長さもいれると、全長5cmはありそうなイオウイロハシリグモを、青野さんが手をのばしてつかもうとしたのには、びっくりしました。それに、ツヤツヤして黒びかりしているアリグモも、見せていただきました。談話会の人に「城内の生徒さん？それじゃ、このクモわかる？」と聞かれたときには、青野さんとふたりで、ひきつつてしまいました。

12時45分まで昼食で、それからまた採集をしながら、山を上りつづけました。午後2時15分から下り始めて、3時40分に大磯駅につきました。途中でわかれた人もいたので、大磯駅に戻ったのは数名でした。少し疲れました。

見たクモの名前を全部覚えることはできませんでしたが、それなりに勉強になったと思うし、ハイキングみたいで楽しかったです。最近では、ジョロウグモを見ると網をつづっています。ふるえるのを見て、何度もやってしまって、思わず網に穴をあけてしまうこともあります。

（1985年7月）

参考文献

平塚クモの会 1986 平塚市の真正クモ類(1) リストおよび分布. 平塚市博物館
研究報告 自然と文化№9:75-102

編集後記

KISHIDAIAN No.54をお送りします。前号の発行よりだいぶ経ってしまい、投稿された方やKISHIDAIIAをお待ちの皆様にはたいへん御迷惑をおかけいたしました。おわび申し上げます。

以前よりKISHIDAIIAには完全な研究論文だけでなく、気がついたこと、小さな発見、こんなことがありました報告、といったコミュニティ感覚の記事も気楽に載せてゆきたいと考えていました。今回はなかなか楽しい原稿が集まりました。いかがでしたでしょうか。読後の皆様の御意見をお聞かせ下さい。また、こことのところ採集会等の活動報告が滞っています。私も含め実行責任者の方には連絡済みです。すでに原稿を送ってくださった方もおります。次号より年度に関係なく、投稿されしだい今までの活動報告を載せてゆきますので御期待下さい。なお、休眠しておりましたDRAG LINE（小観察メモ）を再開したいと思います。こちらへの投稿もよろしくお願ひします。

すでに談話会通信で御在知のことと思いますが、鳩田順一氏の都合により今回より編集が熊田に移りました。役員内のことではありますが、長い間編集に労をとっていただきありがとうございました。

なお、原稿の発送には御注意下さい。昭和62年4月以降は下記へお送り下さい。

〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199

熊田憲一宛

KISHIDAIIAへの投稿規定や原稿作成上の注意については50号～53号をご覧下さい。不明な点がありましたら編集熊田へおたずね下さい。

KISHIDAIIA No.54 1986年12月30日印刷 編集者 熊田憲一

1986年12月31日発行 発行者 萱嶋 泉

発行者 東京蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市多摩平7-15-9

萱嶋 泉方

印刷所 イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町24-7

KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No. 54 December 1986

— 目 次 —

新海 明： 沖縄クモ観察記 1

稻葉等代・稻葉茂代： はじめてのクモの飼育 ヤサコマチグモ 10

熊田憲一： ハネグモ跳ねた 13

~~~~~ 東京蜘蛛談話会活動報告 ~~~~~

熊田憲一・加藤輝代子： 昭和58年度観察採集会報告 広徳寺周辺のクモ 15

池田博明： 昭和60年度観察採集会報告 高麗山のクモ 22